

海南島の大規模バナナ農園

2011.11.16

香港 花木

(1) 海南島とバナナ

海南省は中国で最も南、北緯 16 度から 20 度の亜熱帯地域に位置する海南島を中心とする省である。1988 年に広東省から分割され独立した省に昇格したが、その面積は中国の省としては最も小さく（3 万 4 千平方キロ）、広東省の面積の約 2 割でしかない。これは、台湾よりやや小さく、我が国でいえば九州の面積にほぼ相当する広さである。（偶然だろうが、海南島に昨年未開通した高速鉄道の路線長は、ほぼ今年開通した九州新幹線と同じである。）

海南省では、1 年を通じて暖かいという亜熱帯気候の特性を活かして、ヤシやゴム等が栽培されてきた。ヤシは実だけでなく樹皮や葉、油等その全てが活用できることから亜熱帯地域の小農に特に重宝され、またゴムは中国建国以後改革開放までの間、産業活動を支える戦略性物資として重点的に栽培が強化されたという。

改革開放が始まり、また生活が豊かになる中で、最近ヤシやゴムに代わって急速に拡大しているのが「嗜好品」であるバナナの栽培である。海南省はバナナの生産量では広東省、広西チワン族自治区、雲南省に次ぐ第 4 位にすぎないものの、省の経済に占めるバナナの役割は上位 3 省を上回り、バナナ栽培にかかる熱意とその技術的先進性で中国におけるバナナ市場の「リーダー（引領）」役と見なされている。¹ 今回、海南島のバナナ農園を訪問しその近況を聴取したので以下に概要を紹介したい。²



↑ 海南省（赤）の位置と、その拡大図（右）。

(2) 海南省におけるバナナ農園のビジネスモデル

中国の 2009 年におけるバナナ生産量は約 820 万トンで、世界全体（約 9,600 万トン）の約 8%を占めている。世界的に見ればバナナの世界生産量は停滞しているようだが、その中で中国だけは過去 10 年余りで生産量を 2 倍以上に伸ばしている。理由は簡単で、中国ではバナ

¹ 中国香蕉产业经济问题研究（经济科学出版社）。以下主なデータは本書による。

² 桃山学院大学大島一二教授のご紹介により、海南バナナ協会張錫炎事務局長ほかを訪問した。

ナは「儲かるビジネス」であるからで、実際、過去 10 年間の粗利は（台風被害・病気による被害を差し引いても）年間 30%にもものぼるといふ。

① 一般的なバナナ農園経営モデル

バナナ農園経営になじみのない方（ほとんどがそうだと思うが）のために、まず最初に海南島の一般的なバナナ農園経営モデルを紹介する。バナナ農園では、1 ムー（666 m²）当たり約 160 本のバナナの苗木を植えることができる。苗木は 1 度植えれば何年でも収穫できるため、台風の来ないフィリピン等では樹齢数十年になるバナナの木が現役で活躍しているが、海南島では台風がある³ため、最大でも 5 年程で苗を植え直したり、古株を切り取って新芽を育てるのが一般的である。

収穫はほぼ 1 年サイクルで、平均コストは水やり、施肥等人件費も含めて年間苗木 1 本当たり約 40 元（半分近くは肥料代）かかるが、苗木 1 本当たり約 20~25kg のバナナが収穫できる。平均的なバナナ卸売価格が 3 元（約 40 円）/kg だとすると収穫収入は苗木 1 本当たり 60 元となるため、利益は 20 元、利益率は 50%（60 元/40 元）となる。バナナ価格は市場動向にあわせて変動するため、価格が 4 元/kg になれば利益率は 100%、逆に 2 元/kg になれば利益はなくなり、それ以下なら赤字である。平均利益率が 50%だとしてそこに台風や病気の被害等が加わるため、上述のように長期間均した利益率は約 30%となる。



↑ 一般的なバナナ畑

³ バナナ栽培の一番の大敵は台風で、樹高が約 1.5m ほどになったバナナの木が台風にあえばほぼ全滅となるため、台風のある海南島では、台風の時期にいかに苗木を小さな状態に保つか（台風被害にあわないタイミングで苗木を植えるか）が極めて重要になる。

② 根底にある土地問題

中国の農民1人当たりの平均耕地面積は1ムー程度と我が国の約3分の1にすぎないが、人口密度が比較的安く山地の多い海南省ではこれが約5ムーだそうである。しかし、他の地域ほど稠密な栽培は行っておらず、小規模な水田や自家用野菜栽培の他はヤシの木や荒れ地になっている農地が多かったようだ。

これに対してバナナ栽培は比較的経営面積が広大で、個人経営者を含めてほぼ全て(97.6%)の経営が50ムー(約3ha)以上で、特に大規模化の進んでいる海南島西部楽東県一帯では経営規模が2~3千ムーに達するところもあるという。今回訪問した張錫炎氏の経営する農場は300ムーと中規模だが、他の農場も合わせると島内に1千ムーの規模を有しているとのことだった。

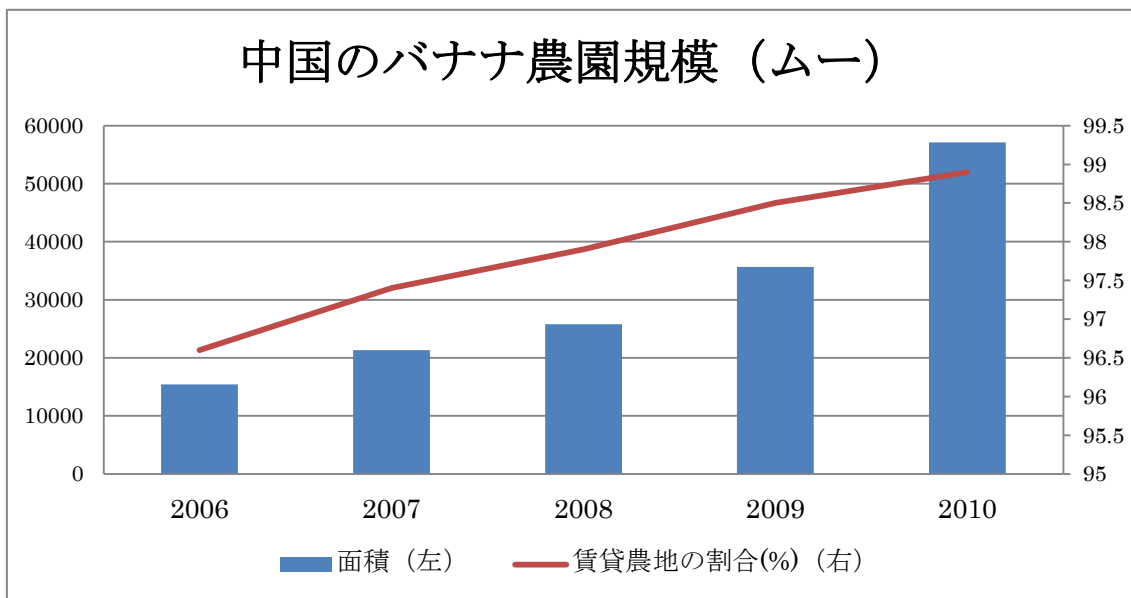
中国におけるバナナ農園経営の最大の課題は、実はどのようにしてこうした大規模な農地を手に入れるかという点にある。中国では農地は集団所有制のため売買はできないが、80年代から「請負経営権(承包権)」が徐々に認知されるようになり、その後法律上も保護されるようになっていった。ただ、こうした権利の移転は、権利の「私的財産化」につながるとして長く認められておらず、正式に共産党が認めるに至ったのは2001年に共産党中央が中央「農家請負地使用権の移転業務を適切に行うことに関する通知」を發出してからのことにすぎない。その後、2002年には「請負経営権」が「物権的権利」として登記できるようになる等更に財産権としての地位を確立して今日に至っている。

中国における農地利用制度の歴史(筆者まとめ)

- 1978年 人民公社の廃止と請負制(承包制)の開始が事実上始まる。
- 1982年 共産党文書により請負制の公認化(請負期間:5年)
- 1984年 請負期間の延長(15年)
- 1993年 請負期間の延長(30年)、「農地割変え制度」の廃止
- 2001年 農地使用権の流動化公認
- 2002年 農村土地承包法の成立(農地使用権の物権化)

実際には、大規模かつ条件のよい(水源に近く、日当たりがよく、かつ粘土質な)土地を集めるためには、狙った地区の村委員会等とかけあい同意を得ることが大きな課題となる。「請負経営権」移転の対価となる「賃料」は、80年代に「ヤミ」で取引されていた時代には1ムー当たり年間5~10元(7~13円)という極めて安値だったというが、現在はその権利が強化され、価値が農民にも広く認知されるようになったことから、一般的な相場は年間1,000~1,500元/ムー(1万3千円~2万円)、条件のよいところでは2,500元/ムー(3万3千円)に上昇している。この価格は、仮に農民が自らその土地で糧食(米、トウモロコシ等)を栽培したとして得られる収入(約1,000元/ムー程度)を上回るため、農地を貸せば農民は遊んでいても耕作したと同じかこれを上回る収入を得られることになり、

更に浮いた時間で自らは都市に出稼ぎして更に収入を増やすことも可能である。このため、海南島での「請負経営権」の移転（農地の賃貸）はここ数年急速に拡大している。



③ 栽培方式

農地が確保されれば、栽培は比較的簡単のようであるが、一方で台風や病気には注意が必要で、特に病気については農薬や、病気に強い新品種の開発等が海南省政府の資金で積極的に行われている。ただし、こうした成果を小規模バナナ農家（个体戸）レベルまで普及する活動は必ずしも進んでいないようで、農家によっては肥料や農薬の与え方等十分な知識がなく、粗放型の生産で品質のばらつきが大きく収量も伸びないところもあるようだ。

訪問した農場は、農場主自らが海南省熱帯農業研究院で委託テーマを請け負って研究しているだけに、施肥や水やりも含めて管理が行き届いている印象を受けた。バナナの生育も早く、7月末に植えた苗木が3カ月たった段階で既に80cm～1m程度の高さに育っており、来年の7月頃には収穫ができそうだということであった。（周辺の農場では、今年9月末に海南島を襲った台風で多くの苗木が倒れ、新たに植え直しているところが多かった。）



↑ 水やり装置



↑ 7月末に植えられたという苗木。11月15日筆者写す。

このバナナ畑で興味深いのは、農場を経営する会社が作業員を雇っているわけではないという点である。会社は農場をいくつかのブロックに分割して、それぞれのブロック毎にバナナ栽培作業を「請け負い」させ、必要な資機材（農薬、給水設備等一式）を供給するとともに営農方法の指導を行い、例えばいつ水やりをするか、いつどのような肥料を与え、農薬をまくか等を指示する。そのうえで請け負った者は収穫バナナ重量（例えば苗木1本当たり20kg）と質を保障し、それより多く収穫できた際には一定のボーナスを受け取るという仕組みになっているのである。なぜ会社が直接労働者を雇用して作業をさせないかとの質問に対して、この会社の理事長でもある張錫炎氏は、「これだけ広い農場で、労働者を直接雇っていてはとても作業を監督しきれない。彼らが作業をさぼればバナナの収穫が減少し会社が損をすることになる。請け負い方式により成果を保障させ、余計に獲れた場合にはボーナスを与えることでインセンティブを与え、わざわざ監督しなくても自然に熱心に作業するようになる。」と解説してくれた。⁴

⁴ こうした「請け負い」方式（「包」という。）は中国ではバナナ農園だけでなく、例えば路上の駐車違反監督業務等でも幅広く見られ（一定の区画の徴収業務を一定金額で請け負わせ、超過収入は自らの設けとなる等。）、中国社会を動かしている一つの重要な仕組みのように思われる。い

作業を請け負うのはここでも地元海南省の農民でなく、広西チワン族自治区等外地からやってきた農民である。彼らは「性格のまじめさ、作業への根気よさ」を基準に審査され、夫婦で住み込みでバナナ農園で働く。バナナ農園の一角にある彼らの住宅はまるで農器具置き場のようなバラックだが、手取りは夫婦で年間 5~6 万元（65 万~80 万円）と大都市に出稼ぎに行くよりも実入りがよく、生活コストもほぼ無料なので、数年間で大きな額を貯蓄でき、また作業で学んだ知識をもとに自らバナナ農園を開設する者もいるという。日本の大規模経営農家も中国からの研修生なしでは成り立たないと言われるが、中国の大規模農業経営も出稼ぎ農民なしでは成り立たなくなっているのである。



↑ 農薬散布作業をする出稼ぎ夫婦。

や、思い返せば改革開放直後の地方政府の財政制度がまさにこの方式（中央政府から請け負った一定額以上の税収は地方が丸取りできる大包干制度）だった。



↑ 請け負い作業者の住むバラック。洗濯物がたくさん干してある。

(3) 中国における企業農業経営と「走出去」

バナナ栽培は個人経営や合作社による経営もあるが、基本は資金量の大きい企業経営である。規模が大きければリスクを軽減できるし、栽培方法も高度化でき、品質を安定させることも可能になるからである。バナナに限らず中国では企業の農業経営参入に制限はなく、土地さえ確保できれば自由に行うことができる。最近の不動産価格低迷で、不動産開発業者や中央国有企業でさえも農業分野への投資に関心を増やしており、「儲かる」バナナビジネスには今後更に大規模資本が流入してくる可能性が高いと張氏は語っていた。

実際、バナナ栽培の最大の「敵」は台風、病気等のリスクである。保険制度もあることはあるが高価かつ条件が厳しくなかなか普及していないし、リスクヘッジのためのバナナ先物市場も現状では開設されていない。こうした中でリスクを避けるためには「生産地を分散する」ことが最も有力で、現に張氏は海南島以外に広西チワン族自治区や雲南省（台風は来ないが冷害のリスクはある）にも海南島とほぼ同規模のバナナ農園を所有しているとのことであった。仮に大規模な台風で海南島の出荷量がゼロになったとしても、それによるバナナ相場の高騰で残りの農園から出荷するバナナで十分儲けることができるというのである。こうした「企業的発想」がバナナ農園経営には不可欠のようである。

とはいえ、中国では細分化された農地を集めることは困難になりつつあるようだ。中国

のバナナ消費量は生活水準の向上に伴いまだまだ伸びると見込まれており、今後は農地の制約のある国内でなく、大規模農地が比較的容易に獲得できるベトナム、ミャンマー、タイ、ラオスといった東南アジア一帯に今後投資を拡大することに大きなチャンスがあるようだ。これは上記のリスク分散戦略にもマッチするとともに、中国政府が唱える対外投資拡大（「走出去」）戦略とも一致する。中国では大規模企業が海外に農場を経営している例も増えているが現状では必ずしも利益面の貢献は乏しいことから、「儲かる」バナナの海外投資には「中糧」（売上高で全業種世界 366 位。コスモ石油、アイシン精機とほぼ同規模。）をはじめとする中央国有企業もその豊富な資金をこうした分野に入れてくる可能性があるというのである。仮に本格的に中国国有企業がバナナビジネスに乗り込んでれば、その投資能力はアメリカ系有名バナナ企業を上回ると見られることから、現在の世界バナナビジネス地図を大きく塗り替える可能性すら秘めているといえよう。

今回、張氏のバナナ農園を訪問し、これまで全く知らなかったバナナ産業について様々なことを学びその前途が有望であることを知った。しかし、実は最も印象的だったのが、張氏の下で働く若い職員の姿だった。彼らは南京農業大学や内蒙古農業大学を卒業し、大学で学んだ農学の知識を現場に応用し、農民を指導するとともに自らも資金を投じてバナナビジネスに参入していた。現代化を進める中国の農業が、農民個人経営だけでなく合作社や企業にも等しく開放されていることがこうした若者たちに農業を「将来性のある産業」と認識させ活躍の場を与えているのだと感じた。市場価格に連動した中国の農業は正直で、品質を高めブランドを築けば、都市での仕事を上回る収入をもたらしてくれる「夢」があるのだから。

(以上)

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。

文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。